

成田市
芦田台1・2号塚

—県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1985

財団
法人千葉県文化財センター

成田市
芦田台1・2号塚

— 県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

1985

財団
法人 千葉県文化財センター

序 文

日本の空の玄関、新東京国際空港を擁する成田市は、近年、成長の一途をたどり、近代都市として変貌しつつあります。しかし、古くから信仰の地、門前町としての性格をもち、特に近世以降栄えてきた町でもあります。また、この地域は、利根川、印旛沼の自然条件に恵まれていることから、原始、古代をはじめ中、近世に至るまで、貴重な歴史的財産を多く残していることでも知られております。

このたび千葉県土木部では、道路整備の一環として成田・下総線建設事業を計画しました。

そこで、千葉県教育委員会は、路線内に所在する「芦田台塚」の取扱いについて、千葉県土木部と慎重な協議を重ねた結果、止むを得ず、発掘調査による記録保存の措置を講じることで協議が整いました。

発掘調査は、当時千葉県文化財センターが当ることとなり、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部、地元関係者と詳細な打合せを行い、昭和58年6月から7月まで発掘調査を実施しました。

このたび、その調査成果を「芦田台1・2号塚」として刊行することとなりました。この報告書が学術資料としてまた、郷土を知る教育資料として、広く一般に活用されることを期待する次第です。

終りに、発掘調査から整理に至るまで多大な御協力、御支援をいただきました、千葉県土木部、千葉県成田土木事務所、千葉県教育府文化課、成田市教育委員会をはじめ、関係諸機関にお礼を申し上げるとともに、酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様には心から謝意を表します。

昭和60年3月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

- 1 本書は、千葉県成田市芦田字台における県道成田下総線建設に伴う塚の発掘調査報告書である。遺跡のコード番号は211-030とした。
- 2 調査は、発掘を昭和58年6月15日より同年7月22日まで、整理を昭和59年10月1日より同年12月31日までとし、千葉県教育委員会の指導の下に、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。
- 3 発掘調査は、調査部長白石竹雄（昭和59年3月まで）、同部長補佐岡川宏道の指導の下に、班長高橋賢一、調査研究員伊藤智樹が当たり、整理、本書の原稿執筆及び編集は、調査部長鈴木道之助、同部長補佐根本弘、班長高橋賢一の指導の下に、調査研究員伊藤智樹がこれに当たった。
- 4 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
2万5千分の1図（N 1-54-19-10-3）国土地理院発行 昭和52年9月
2,500分の1図 成田市都市計画図 №19, №26
- 5 発掘調査及び報告書刊行までに下記の諸機関、諸氏の御指導、御協力を賜わりました。記して謝意を表します。
千葉県土木部道路建設課、千葉県成田土木事務所、千葉県教育庁文化課、成田市教育委員会、大野政治、寺内静、藤下昌信、木川邦夫、成田市芦田地区の皆様（順不同）

目 次

序 文

例 言

1 章 調査の方法と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の方法と経過	1
2 章 遺跡の位置と歴史的環境	3
3 章 遺構と遺物	7
(1) 遺構	7
(2) 遺物	13
4 章 結 語	22

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 遺跡周辺地形図(1/5000)	4
第3図 赤荻新田古絵図	6
第4図 1, 2号塚実測図(1/100)	9
第5図 1, 2号塚断面実測図(1/100)	11
第6図 2号塚下001号土壤実測図(1/10)	14
第7図 2号塚下002号土壤実測図(1/20)	15
第8図 土器, 石器実測図(1/2, 1/3)	16
第9図 石器, 土製品, 石製模造品実測図(2/3)	17
第10図 古錢拓影図(2/3)	18
第11図 縄文式土器拓影図(1/3)	20

図 版 目 次

- 図版1 遺跡近景、1号塚全景
- 図版2 1号塚断面
- 図版3 1号塚溝
- 図版4 2号塚全景、断面
- 図版5 2号塚下001号土壤
- 図版6 2号塚遺物出土状況、2号塚下002号土壤
- 図版7 2号塚下001号土壤出土の石
- 図版8 塚および表土層出土の古銭
- 図版9 塚盛土内出土の縄文式土器
- 図版10 土器、石器、土製品、石製模造品
- 図版11 塚周辺の石造物
- 図版12 遺跡道路脇の道標

第1章 調査の方法と経過

(1) 調査に至る経緯

千葉県土木部は、成田市周辺の交通量の増加に伴う道路網整備の一環として県道成田下総線建設事業を計画した。これに伴い、昭和54年8月、千葉県教育庁文化課に当該地域の「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会があった。文化課では、計画路線内の埋蔵文化財の所在確認の現地踏査を実施し、同年10月、塚2基を含む縄文式土器散布地である旨回答した。

これに基づき関係機関による協議が重ねられたが、昭和57年9月、現状での保存が困難であるためやむを得ず記録保存の処置を講ずることで意見の合意を見た。発掘調査は当文化財センターが当たることになった。

(2) 調査の方法と経過

本遺跡の調査は、昭和58年6月15日から同年7月22日まで実施した。

塚の調査は、塚頂部で塚の中心と思われる地点に任意の杭を設置し、これと道路予定地内の中心杭、および幅杭を基準として墳丘の地形図を作成した。地形図の縮尺は50分の1とした。なお、これに先立ち遺跡内の伐木、下草刈り、現地結所の設置等の環境整備と下総町小御門神社官主により地鎮祭をおこなった。塚周辺の地形図終了と同時に道路予定地内の塚以外の遺構の有無を確認するため、1号塚の北側と南側に幅2mのトレンチを設定し掘り下げに入った。トレンチ内より出土した遺物は、原則として出土地点とレベルを記録した。記録は平板実測で行ない、縮尺は40分の1とした。

塚の墳丘測量終了後、頂部に設定した基準杭を中心として塚の各辺の中央をとおり塚頂部で直交するように2本の土層観察のためのセクションベルトを設け、塚を4分割にして掘り下げに移行した。塚の掘り下げは、盛土内の遺構、遺物の検出に注意を払いながら4つの区を均一的な高さで水平に削平するよう心がけた。6月20日前後には、1号塚、2号塚とともに盛土の削平に移行した。盛土内より出土した遺物のうち、塚に直接関連があると考えられる遺物と、古墳時代の土師器、須恵器については出土位置とレベルを記録し、その他の遺物については、それぞれ分割した各区ごとに盛土中一括遺物として取り上げた。この記録も塚の地形測量の縮尺に合せて50分の1でおこなうこととした。

1号塚では、6月30日の時点で盛土下の旧表土層を確認し、南側の旧表土やや上面で洪武通宝を検出した。2号塚では、7月初旬に旧表土層を確認し、頂部直下の旧表土層やや上面で土



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

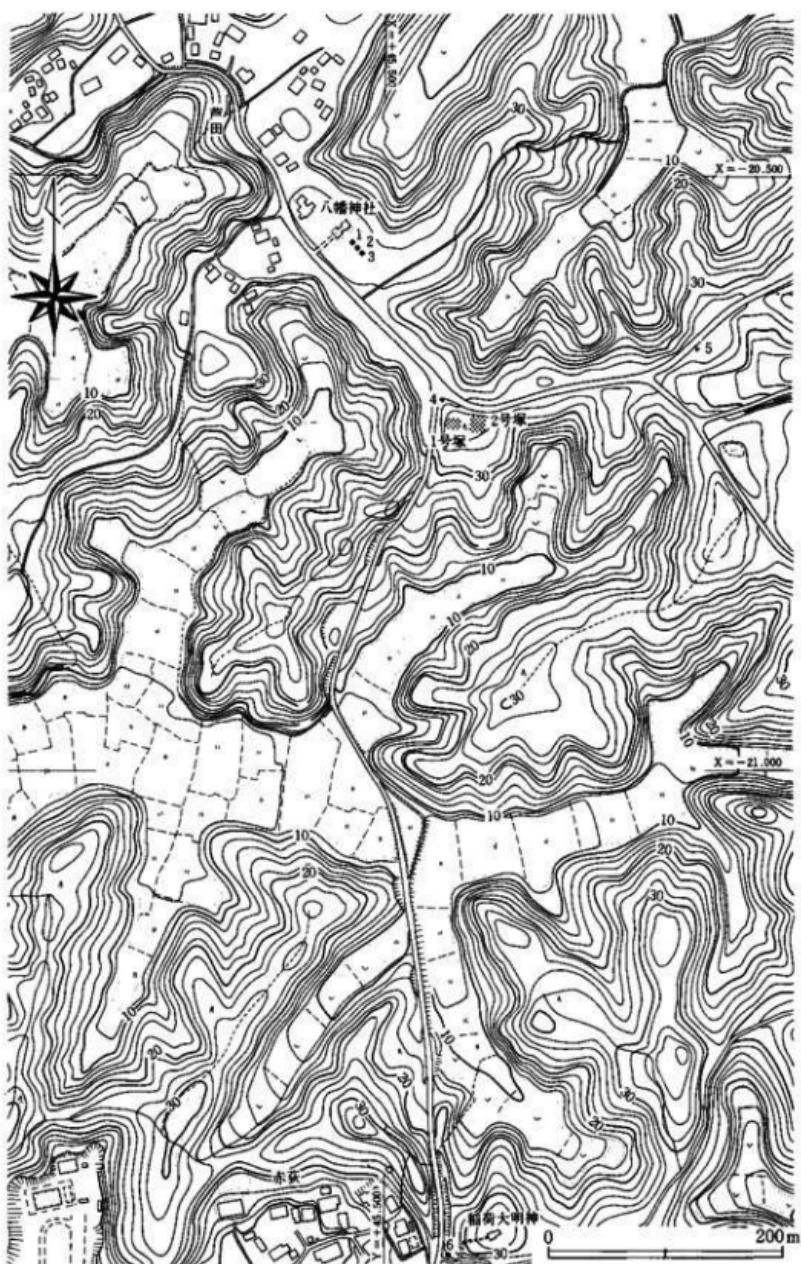
師質の皿型土器が出土している。1号塚では、塚裾部の北から西側にかけて溝状遺構が検出され、この遺構の調査に入った。これに併行して、セクションベルト沿いの幅1mの部分を旧表土下のローム面まで掘り下げ塚の断面図を作成した。断面図の縮尺は20分の1とした。2号塚も1号塚と同様にして、セクションベルトに沿って幅1mを掘り下げ、断面図を作成した。なお、2号塚ではこの間、幅1mで掘り下げを行なう過程で、土師質皿型土器が出土した地点のやや北側で001号土壌を検出したため、土壌の調査を行なった。土壌は、平面図、断面図、遺物出土状況図の3種を記録し、縮尺は5分の1とした。1、2号塚の断面図作成が終了した後、セクションベルトを除去し、旧表土面での地形測量を縮尺50分の1で記録した。1号塚では溝の平面図も含めて記録した。この作業が終了した後、塚下の遺構の有無を確認するため旧表土層をソフトローム層上面まで削平した。この結果、2号塚下、001号土壌のわずかに北側で土壌を検出し、002号土壌として調査を行なった。記録は001号土壌の方法に従った。なおこれに併行して、盛土内および旧表土層中より、先土器時代の剝片が検出されていたため、それぞれの塚のセクション杭を基準として、2×2mの小グリッドを6ヶ所に設定し、先土器時代の遺構、遺物の有無を確認した。この結果、2号塚下ローム層上位より、数点の剝片を検出した。この調査の終了後、埋め戻しを行ない、本遺跡の調査の全日程を7月22日に終了した。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は、成田市芦田字台2137-1他に所在する2基の塚である。成田市の中心街からは北北東に約4.5kmの距離にある。成田市の南、印旛郡富里村に源を発して市域のはば中央を北流して利根川に合流する根木名川とその支流の取香川(尾羽根川)、荒海川とに挟まれた地域で、地形的には下総台地の北東部にあたるが、全体に細長い舌状の台地が樹枝状に低地にはり出し、平坦面の少ない馬の背状を呈している。

塚は、この馬の背状の台地上に位置しており、北から古市場、芦田を経て赤萩、成田市街へと至る道と芦田から東和泉、西和泉、また野毛平を経て大栄町、富里村方面へと至る道の三叉路脇に築かれている。

塚周辺の遺跡は、同じ台地上に古墳時代の芦田遺跡(2)、奈良・平安時代の台遺跡(3)があり、また本塚を含めた八幡台古墳群中にも2基の塚が存在している。北に目を転じると、荒海川を挟んで縄文時代中期～晩期の荒海貝塚(1)、荒海北貝塚がある。南には、小支谷を隔てて縄文時代前期の赤萩遺跡(4)、新妻貝塚(5)が所在している。取香川付近では、縄文時代～奈良・平安時代の野毛平同免取香川低地遺跡(8)、古墳時代の野毛平高台遺跡(7)、弥生時代～古墳時代の関戸遺跡(6)などが所在している。この他周辺には、先史時代から古代の様相を把握できる多くの遺跡が確認されている。



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

中世においては、この地域は千葉氏の勢力範囲になり、遺跡の北東の東和泉には、千葉氏の一族である大須賀氏の居城であったと伝えられる東和泉城址（9）があり、また根木名川の対岸には、千葉氏一族の荒海城址（10）がある。なお塚の西にある八幡神社は、特に千葉氏一族の尊崇が厚かったと伝えられている。

近世には、下總国埴生郡となり、その多くは、佐倉藩の所領となった。現在の各地域の名（塚周辺の芦田、赤荻、東和泉、西和泉）は、旧村名として残っており、中世～近世初期には、各村の単位が整っていたようである。なお赤荻には、本塚群と関連すると考えられる絵図が保存されている（第3図）。これは、江戸時代末期の文久元年（1861）に赤荻新田名主加平治他2名の連名で記録したもので、これによると赤荻村、芦田新田との境の角地に塚3基がみえ、庚申塚、念仏塚、大日塚の名がしるされている。地元には、本塚群の他にはこれに該当する地区はない。またこの地域は市内でも庚申塔や道標などの石造物が多く残されており、塚との関連においても注意されるところである。

明治時代以降は、明治22年（1889）の町村制施行により芦田、赤荻他8地区とともに中郷村となり、昭和29年（1954）に町付合併により成田市となり現在に至っている。

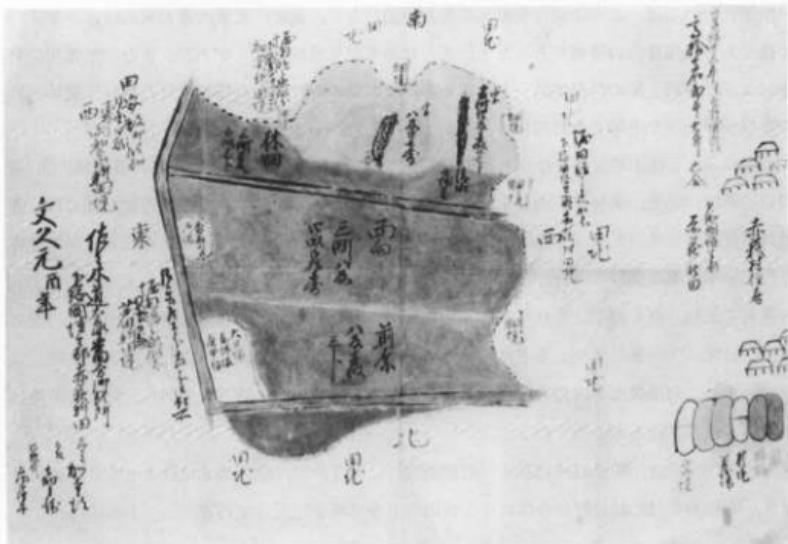
塚周辺の石造物（第2図、図版11・12）

1～3は八幡神社の境内に造立されている。

1. 庚申塔。青面金剛像であり、石面に天保二年辛卯11月吉日、左面に土屋河岸石工半兵衛と刻印がある。台座には人名32名が明記されている。天保2年（1831）造立。
2. 庚申塔。正面に青面金剛像と刻印され、台座には17人の人名が記されている。文政2年（1819）巳卯二月吉日の銘がある。
3. 庚申塔。青面金剛像。享保12年（1727）の造立。
4. 塚と道路境に立つ道標。安永4年（1775）の造立。正面中央に帰峯・・晴優婆塞。その右に安永四乙未年。左に霜月吉日彫刻。下に滑川道とある。また右側面に右成田道、左側面に左八日市場道 施主三橋氏と記されている。
5. 西和泉への道脇に立つ馬頭観世音。寛政4年（1792）造立。馬頭観世音菩薩、寛政四子年十月吉日、地本西和泉村、東和泉村、芦田村の刻がある。
6. 庚申塔。赤荻の稻荷大明神脇にあり、享保16年（1731）の造立である。

参考文献

- 藤下昌信・宮入和博他「土室遺跡発掘調査概報」「野毛平・同免取番川低地遺跡の調査」「成田市の文化財」第5輯 成田市教育委員会、昭和48年
森 耕一 「中郷地区石塔調査」同上。
小倉博他 「民俗調査－成田の民俗（赤荻地区）」『成田市の文化財』第7・8輯 昭和51年



第3図 赤荻新田古絵図



大野政治他『成田市文化財分布調査報告書－埋蔵文化財編－』成田市教育委員会、成田市埋蔵文化財分布調査団 昭和49年

谷 句他 「野毛平高台遺跡」「成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」即千葉県文化財センター 昭和55年

谷 句他 「関戸遺跡」「成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」即千葉県文化財センター 昭和58年

成田市教育委員会「成田の歴史散歩No.1－久住、中郷地区」昭和57年

成田市史編さん室『成田市史』原始古代編 昭和55年

『成田市史』民俗編 昭和57年

第3章 遺構と遺物

(1) 遺構

1号塚（第4・5図、図版1・2）

本塚は、2号塚の西に位置している。赤荻から芦田へ登る道端に寄っており、塚の西端は、この道路を見下す切り通しにあたっている。調査前の観察では、やや扁平な感じの高まりをもつ円形状の形態に看取されたが、墳丘測量の結果方形を呈することが判明した。ただ、北東側裾から塚頂部にかけて、一見、道状のような凹みがあり、また、西南側では中腹から裾部が崩落している箇所があるために、全体の形は、かなり歪んだ形状を呈していた。塚裾は、北側から東側にかけて、周辺の現地表面より20~30cm程低くなっていた。また西側から南側は自然傾斜となり台地からしだいに低くなっている。

塚の規模は、東西方向の1辺が9.2m、南北方向の1辺が10.3m、現地表面からの高さは1.78mを測る。塚頂部の標高は38.18mである。

盛土は、塚下の旧表土層である黒色土を基底面として築かれている。構築の方法は、旧表土層を基底として、まず高さ0.7~0.6m程度までを黒色土、褐色土を主体としてロームブロックを混入させた土砂で均一な高さに積み上げ、その後、褐色土、暗褐色土、黄褐色軟質ローム、ロームブロック等を適当に混合させて塚中央から外縁方向に盛り上がるように積み上げている状況であった。盛土中には軟質ローム、ロームブロックが割合多く混入しており、これは後述する塚裾部より検出された溝と関連が深いようである。

盛土中には、古銭の洪武通宝1枚の他、縄文時代早期から前期の土器片、古墳時代の土師器片、須恵器片、先土器時代の制片などが混在して出土している。洪武通宝は、塚中央より南側裾部に近くで旧表土層のわずかに上の盛土中より出土している。また本塚の北側の表土中から

寛永通宝2枚が出土している。

溝（第4・5図、図版3）

本溝は、盛土及び塚裾の削平の際検出されたもので、塚裾の北東側から西、南西側にかけて、塚裾に併行して掘り込まれている。北側部分は、旧状を保っているが、西側は、崖の部分で崩落し完存していない。規模は北側で幅3.70m、深さ0.98mを測り、長さは、東端から西端まで9.94m、西端から南端まで12.75mである。掘り方は、底面から一坦垂直に立ち上がり、上面近くになるにつれて緩やかな傾斜をもつ断面形で、底面の幅は1.30m～1.22mを測る。西側溝の南端では、不整形な掘り込みが存在する。

塚の断面と連続した溝内の覆土の観察では特に塚上面から掘り込んだ形跡はなく、塚下の旧表土も溝中には達していない。このことから、溝の掘削は、塚の構築に際して行なわれたものと考えられよう。

溝内の遺物は、西側に多くみられ、縄文式土器片（早・前期）、土師器片、須恵器片の他、有孔円板、土玉が出土している。

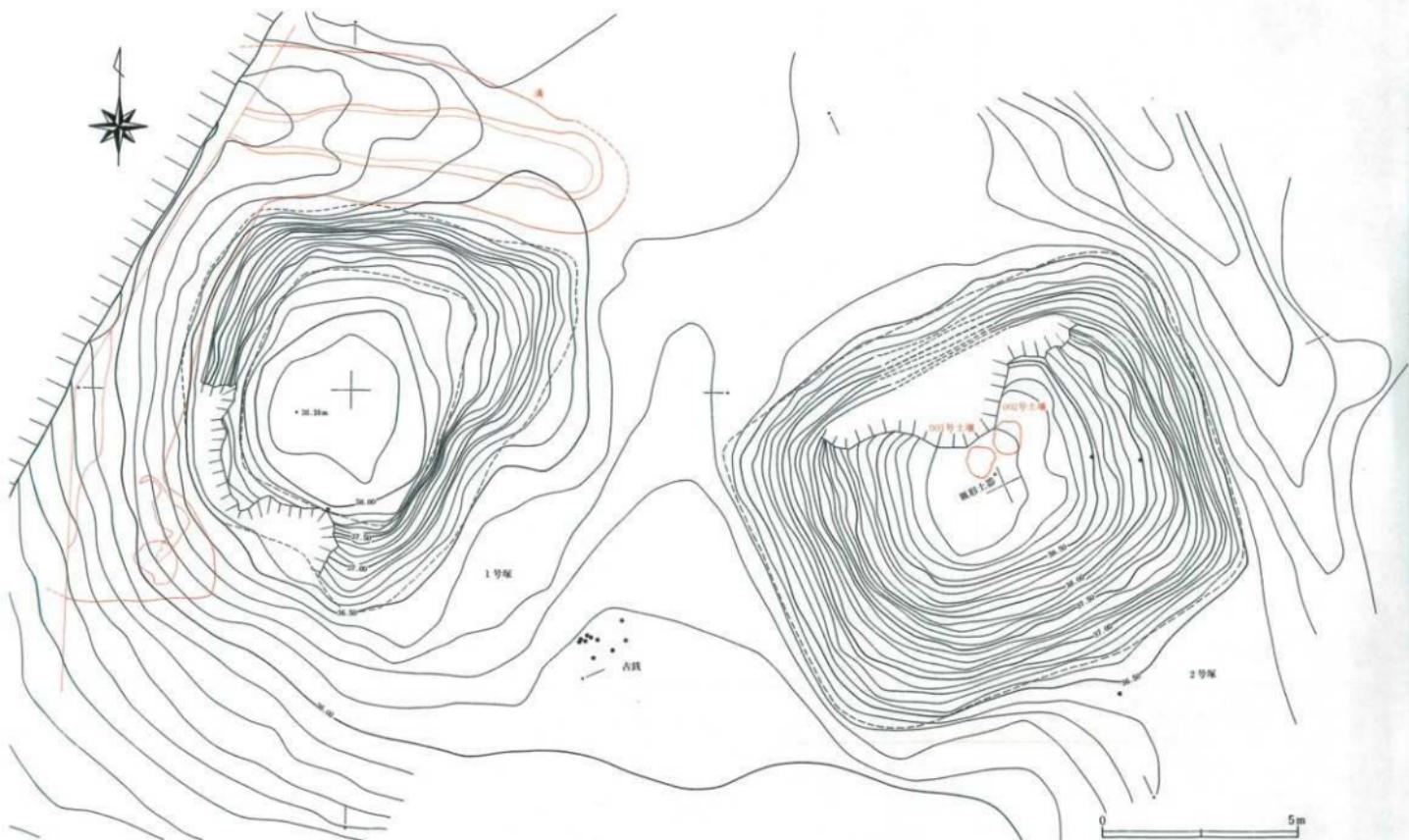
2号塚（第4・5図、図版4）

1号塚の東に位置する。平面形は、方形を呈し北側と南側の辺が11m、西側と東側の辺が8m～8.50mを測る。塚頂部の標高は38.93mを測る。現表土からの高さは約2.6mである。塚の周辺は、1号塚と同様20～50cm程掘り窪められており、特に東側では浅い溝状となっている。調査前の現況は、雑草におおわれて塚頂部に目通り直径30cm程の棘が繁茂していた。

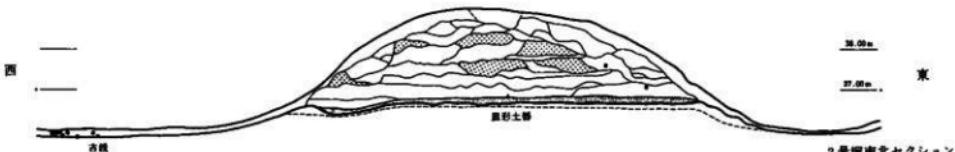
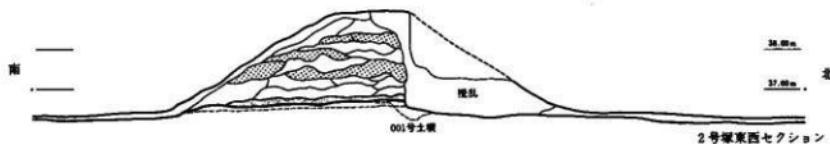
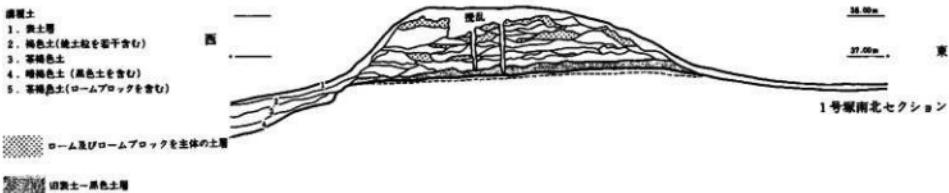
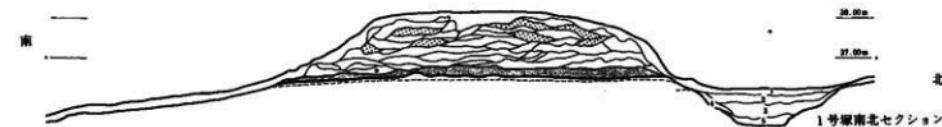
塚は、断面からみると台形を呈し、塚頂部の平坦面の面積は小さい。塚頂部には、石造物その他の遺構は存在していないかった。塚の北側では頂部付近から大きな窪みが認められた。この窪みは、盜掘を受けた跡らしいことが後に判明した。

盛土は、旧表土層である黒色土を基面として築かれている。旧表土層は、塚裾部より60～80cm程の高さにある。旧表土上面から、高さ0.6～0.8m程の高さまでは、褐色土を主体としてロームブロック・赤褐色土を混合した上を水平に積み上げ、その後褐色土、赤褐色土、黒色土、茶褐色土、ロームブロック等を適当に混合し、塚の中央部から外側、外側から中央部という順序を繰り返しながら築き上げていっている。この盛土に利用された土砂は、周辺を削平して得たものであろう。

塚に関連する遺物は、寛永通宝と土師質の皿型土器が出土している。寛永通宝は、東側盛土内から1枚、南側塚裾部で1枚、西側の塚よりやや離れた1号塚との中間の表土中より10点出土している。また皿型土器は、塚の中央部で塚頂から2.18m下の旧表土やや上より1枚出土している。この他盛土中より、縄文時代早期～前期の土器、土師器、須恵器の小破片及び先土器時代の剝片が出土している。



第4図 1, 2号塚実測図 (1/100)



0 5m

第5図 1、2号塚断面実測図(1/100)

001号土壤（第6図、図版5）

本土壤は、塚頂部の真下のわずかに北側に位置する。土壤の確認は、旧表土層の削平中であったが、北側の大部分は、塚側面からの盗掘坑による擾乱がソフトローム層まで達していたために、実際の遺構の掘り込み面は明確には確認できなかった。

平面形は、歪んだ橢円形を呈している。規模は、長径0.85m、短径0.69m、確認面よりの深さ0.28mを測る。底面は、ハードローム層までは達していないため軟弱で、立ち上がりは、緩やかな傾斜である。立ち上がりの状況から推定すると、実際の掘り方の径は1m以上はあったものと考えられる。

遺物は、人頭大の火山性噴出岩が2点、角錐状に一方がくびれた砂岩製の砥石1点、扁平な緑色片岩の礫2点、土師質皿形土器破片、土師器甕破片、須恵器甕破片が出土している。火山性噴出岩は、土壤底面に2個が凹凸面を組み合わされるように置かれた状態にあり、そのやや上面より、土師質皿型土器破片と緑色片岩の礫が、さらに上面で砂岩製の砥石が出土している。礫2点は、接合している。また、土師器の甕破片は、噴出岩の下面より出土しているが、1号塚盛土中の破片と接合している。

002号土壤（第7図、図版6）

001号土壤の北東側に接続している。遺構検出面は、旧表土下のソフトローム層上面である。平面形は、不整の橢円形を呈し、長径0.87m、短径0.74m、深さ0.23mを測る。底面は、軟質で、中央より南側で最も深く窪んでいる。掘り方の立ち上がりは南側で緩やかで、北側は垂直に近くなっている。覆土は、黒色土を主体とした単一層である。

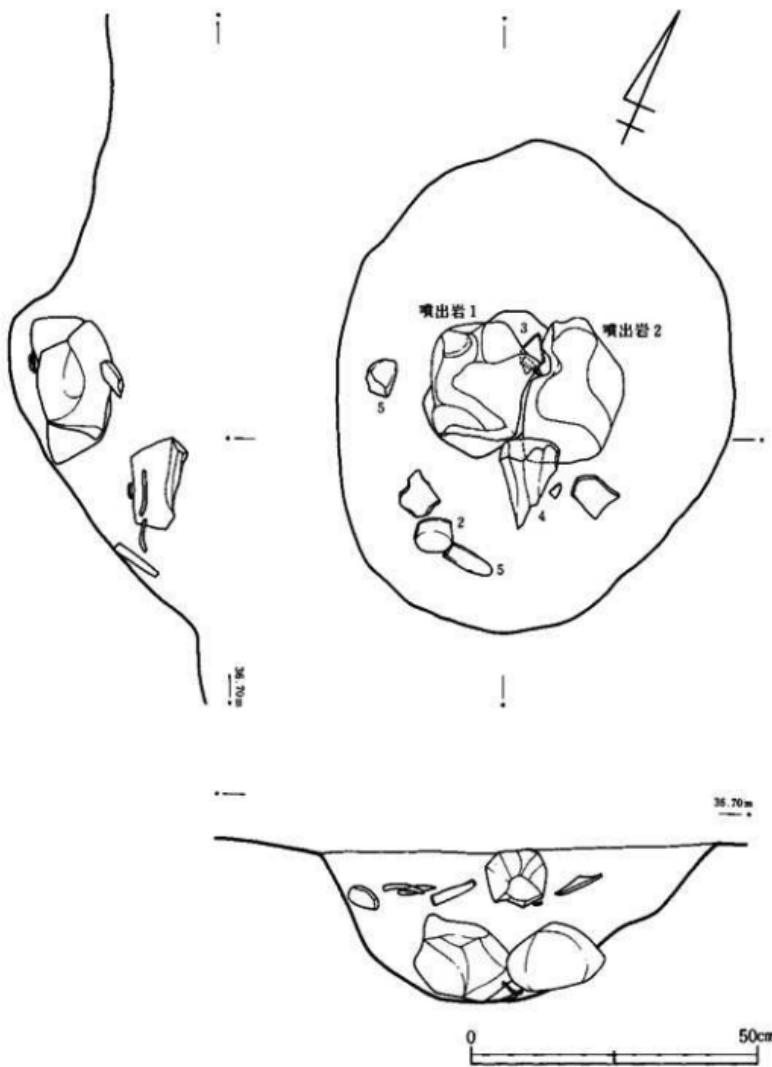
遺物は、南側の壁際より縄文式土器の小破片が3片と中央部より石匙が1点出土している。いずれも底面より上面であるが、遺構に伴うものであろう。なお、土器片は、小破片のため、実測、拓影は困難であるが、縄文時代早期の特徴をもつものである。

(2) 遺物

土師質土器・土師器（第8図1・2・3、図版10）

1と2は、いわゆるカワラケと呼ばれる小皿の類である。1は、2号塚頂部からわずかに北西側の塚下旧表土上面で出土している。土師質で、口唇部は丸く、体部からやや外方に緩やかに立ち上がる器形を呈する。底部は、わずかに上げ底となり、回転糸切り痕が残っている。口クロ成形であるが、器壁は部厚く、全体のつくりはやや粗雑である。外面は、体部から口縁部の一部分に粘土の凹凸が残り未調整となっている。内面の一部分に黒斑が認められるが、灯明皿として使用したものかどうかは不明である。胎土は、緻密で砂粒の混入が少ない。色調は褐色を呈する。焼成は良い。口径11.1cm・底径5.58cm・器高2.4cm、完形。

2は、1と同様の器形を呈するが、口唇部の外反がわずかに1より強い。成形はロクロ成形



第6図 2号塚下001号土壤実測図(1/10)



第7図 2号塚下002号土壤実測図(1/20)

で、底部に回転糸切り痕が残っている。胎土・色調・焼成とともに1と同様である。口径(推)11.5cm・底径(推)6.4cm・器高2.75cm・約1/4残。

3は、土師器の底底部である。輪積み形成で、外面は幅のせまい工具によるヘラケズリ、内面はナデ整形されている。全体に器壁は厚い。底部に木葉痕を有する。胎土に白い石英粒を多く含み、器面に表われている。焼成は良く、褐色を呈する。底径8.2cm。

石器(第8図4・5、第9図1~3
図版7・10)

4は、砾石として使用されたものであろう。短辺側は自然面を残しているが、長辺側は9面に整形されよく研磨されている。数ヶ所に削痕が残る。砂岩製。

5は、緑色片岩製の扁平な磨石である。表・裏1箇所づつにくぼみを有する。粗い感じの磨滅である。

第9図1は、石匙である。椎型のもので、細部までよく調整される。つまみの部分は、わずかに彎曲している。先端を欠く。チャートで現在長58.8mm・最大幅16.3mm・最大厚11.8mmを測る。

2は、砂岩製の磨製石斧である。刃部は鋭利な仕上げとなっている。全体によく研磨されている。完形。最大幅42.8mm・最小幅31.6mm・厚さ10.2mm。

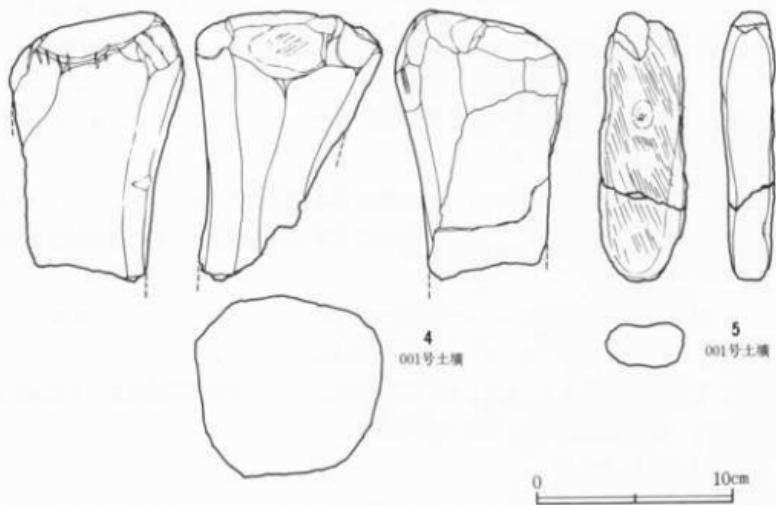
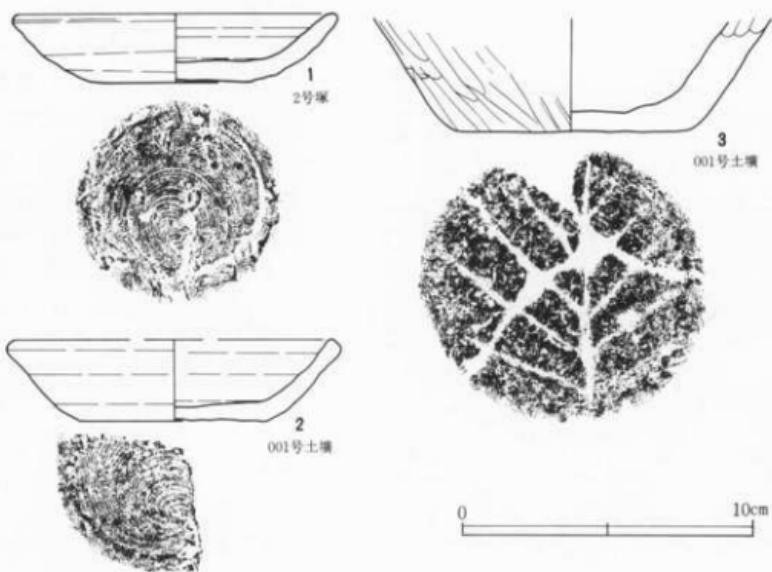
3は、頁岩製の石鎌である。ほば二等辺三角形を呈し、えぐりはわずかである。調整加工は入念である。完形。長さ19.5mm・幅14.4mm・厚さ3.7mm。

土玉(第9図4、図版10)

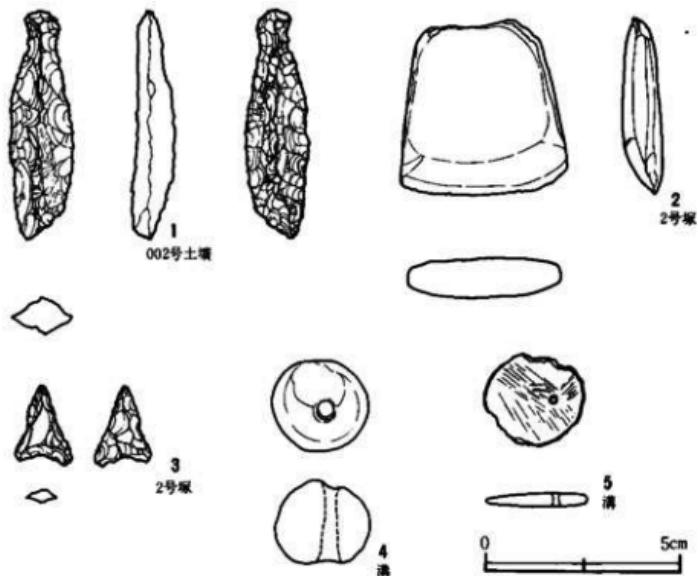
1号塚西側溝中より出土している。ゆがんだ球形で、ほば中央に穿孔される。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。径2.47×2.31×2.1mmを測る。

石製模造品(第9図5、図版10)

滑石製の有孔円板である。孔は一方に穿たれているだけである。両端を欠いている。径25.25



第8図 土器・石器実測図(1/2・1/3)



第9図 石器・土製品・石製模造品実測図 (2/3)

mm・厚さ3.15mmで表面に研磨痕が残っている。

噴出岩 (図版7・1, 2)

001号土壙中央より出土したものである。火山性の噴出岩で、2個が組み合わせられたように埋置されていた。

1は、最大長24.9cm・最大幅21.4cm・厚さ10.9cm・重さ3.5kgで、一方が部分的に抉れている。全体に細かい孔が無数にある。

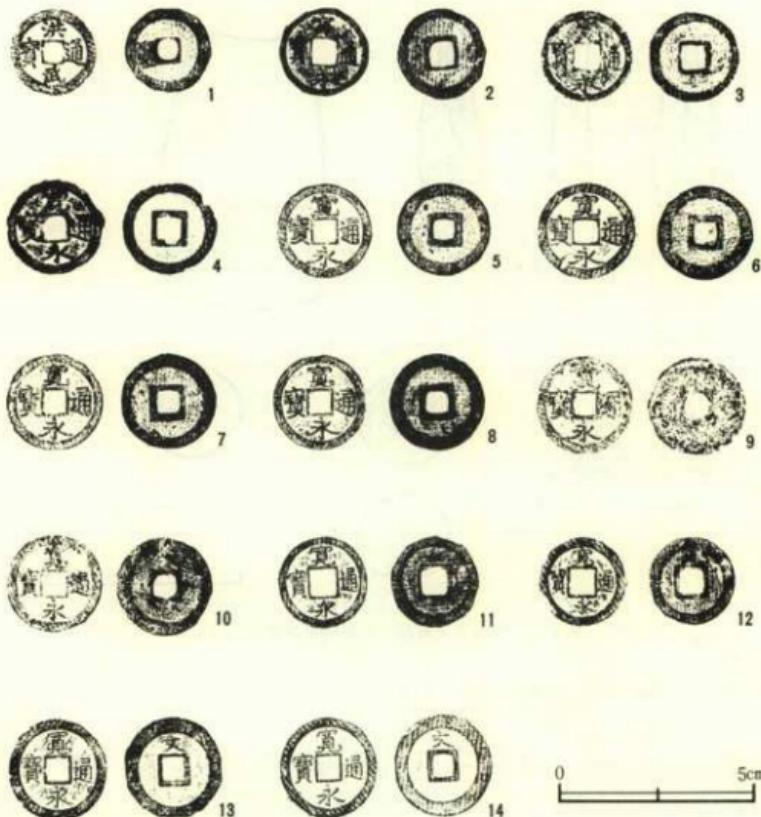
2は、最大長20.2cm・最大幅18.4cm・厚さ13.4cm・重さ3.9kgを測る。方形に近い形状だが、部分的に突出部をもつ。1と同じように表面には無数の孔がある。

古銭 (第10図、図版8)

本遺跡で出土した古銭は総数24枚を数える。種類は、洪武通宝1枚、寛永通宝23枚である。それぞれの出土位置は、1号壙盛土中1枚、1号壙北裾表土中2枚、2号壙盛土中2枚、2号壙南裾表土中1枚、2号壙西裾表土中18枚となっている。

洪武通宝

1号壙旧表土層上面で出土している。全体に太い字体であり、背文はない。わずかに磨滅している。渡来銭のうちの明錢である。



第10図 古銭拓影図 (2/3)

寛永通宝

総数23枚のうち、いわゆる「古寛永」といわれるものが7枚、寛文8年(1668)以降の鋳造である「新寛永」が16枚である。

古寛永は4～9、12である。それぞれ、字体に若干の違いがある。12は他に比べて怪が小さく、裏面に文があるようだが、判然としない。4は外縁の一部が欠けている。すべて銅銭である。

新寛永は2、3、10、11、13、14である。この他に遺存状態が不良のため図示できないものがあり、鉄銭が7枚含まれている。13、14は背文に「文」をもつ。亀戸銭である。2、3は、背文をもたない「享保七条銭」といわれるものである。全体に字体は鮮明であり、手ずれも少な

い。図示したものはすべて銅鏡である。銅鏡（図版8）は鏽化が著しく、字体も判読できないものがほとんどである。

参考文献

小川 浩 「日本の古鏡」人物往来社 昭和41年

盛土内出土の縄文式土器

1号塚、2号塚の盛土内より出土した縄文式土器は、すべて破片として検出されており、縄文時代早期から中期初頭に比定される土器である。総数は、土師器片、須恵器片に比べるとるかに多い出土量であったが、細片が多いため、文様による分類可能な遺物を図示した。時期的な面からみると、縄文時代前期後半の遺物が総体的に多く認められている。以下、大まかではあるが、早期、前期～中期初頭に区分して説明を加える。

I群 縄文時代早期に位置づけられる土器であり、田戸下層式、田戸上層式、茅山上層式土器がある。

a類 田戸下層式土器（第11図1・2）

1は、口縁部破片、2は、口縁よりやや下の部分である。太い沈線を横方向に施文する。胎土は、砂粒を含み、黄褐色を呈する。

b類 田戸上層式土器（第11図3・4・5・6・7・22・23）

3、4、5は、口縁部破片である。小さな山形の口縁の頂部に小突起を有し、口唇部に刻目を加える。3・4の小突起上には貝殻腹縁により押捺が施され、口縁下は細い施文具で押引文を幾可学的に施文する。胎土にごく微量の繊維を含む。内面、外面の整形は丁寧で、器壁は薄い。赤褐色を呈する。6は、わずかに波状となる口縁部で、口唇部に刻み目が施される。口縁直下の間隔をあけた押引文の下に、深く刻まれた平行する押引文と沈線文を施文している。7は、無文の波状をなす口縁部で、補修孔が穿たれている。胎土、焼成の特徴が、22、23に類似している。22、23は貝殻腹縁文が線状に施文される。以上b類とした土器は、いずれも焼成が良く、胎土にわずかに繊維を含むものと、そうでないものがみられる。

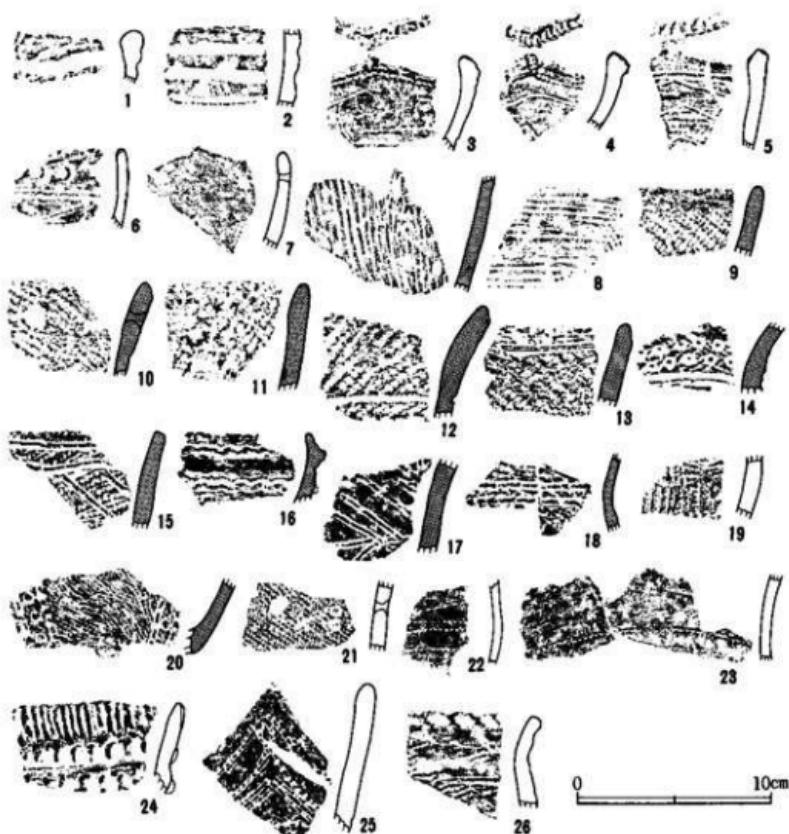
c類 茅山上層式土器（第11図8）

胎土に繊維を多く含み、表裏に貝殻腹縁によって条痕文を施した土器である。図示できたのは1点のみであるが、小破片が他に10数点出土している。

II群 前期から中期初頭に相当する土器群で、黒浜式、諸磯式、浮島式、下小野式土器がある。

a類 黒浜式土器（第11図9～18・20）

9～11は、口縁部で縄文のみが施文される土器であり、施文方法がバラエティーに富んでいる。10には、補修孔が穿たれている。12～15、18、20は、縄文を地文として竹管、あるいは半



第11図 梶文式土器拓影図 (1/3)

裁竹管によって文様を施している土器である。このうち、15は平行沈線が明瞭であり、20は有節平行沈線の間に竹管文を施している。16は降帯のある口縁部で、これを境に上下にコンバス文を施している。17は半裁竹管による脇骨文を横方向に施す。以上の土器は、いずれも胎土に繊維を多く含んでいるもので、盛土内で最も多く出土している。

b類 諸磯式土器 (第11図21・25)

21は楕文を施して、竹管文が施される土器で補修孔を有する。胎土に砂粒を含み、焼成もいい。25は大きな波状をなし、やや内傾する口縁部で、口縁に平行するように山形に四列の有節平行沈線を施す。25は諸磯a式、21が諸磯b式に相当するであろう。

c類 浮島式土器 (第11図19・24)

19は、貝殻腹縁を連続して施す土器で、胎土に細砂粒を含む。わずかに擦痕が認められ

る。24は、口縁部に縦長の深い刻目を施し、輪積みに沿って押捺を加えている。胎土に細砂粒を含む。浮島II式に相当する。

d類 下小野式土器（第11図26）

口縁が外反する器形となる土器で、縄文を地文としている。口唇部に押捺を施し、その下端に横位の結節縄文が加えられる。縄文の原体は単節のRLである。胎土に砂粒を含み焼成は普通である。

参考文献

- 西山太郎 西川博孝他「No.7遺跡」「新東京国際空港 墳墓文化財発掘調査報告書IV」誌 千葉県文化財センター 昭和59年
- 白石竹雄他「銀山満東遺跡」房総考古資料刊行会 昭和50年
- 西村正衛「石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として」早稲田大学出版部 昭和59年

注

第11図中の土器断面をスクリーントーンで示したものは纖維を多く含む土器である。

第4章 結語

これまで述べてきたように、芦田台1、2号塚の調査は塚についてのいくつかの知見を提示している。本章では、調査によって得られたいいくつかの知見をもとにして、塚の性格、構築年代等に関する私見を述べ、まとめとする。

さて、今回の2基の塚の調査の結果、1号塚では旧表土層上面より洪武通宝が出土し、また、塚北側から西側にかけて塚裾を周る溝を検出した。2号塚では、塚頂部の真下の旧表土層上面より土師質の皿形土器が出土し、さらに塚下より2基の土壙が検出されている。このうち、001号土壙は旧表土削平中に検出され、土壙内より一対に組み合わせたような状態で置かれた2個の噴出岩、砥石、磨石、皿形土器が出土し、旧表土上面より出土している皿形土器と土壙内より出土したものに類似性がみられるところから、この土壙を塚に関連する遺構として把えた。塚の構築方法は、1号塚、2号塚ともに旧表土層を基盤として周辺の土砂及びローム層を掘り込んで得られた土砂を利用して盛土している状況が認められた。千葉県内ではすでに数多くの塚が調査されているが、ロームを利用する塚の例は、印旛郡白井町白井第2塚群の大小16基の塚のうちの一部(注1)、印旛郡本塙村大門塚群3号塚(注2)、印西町大塚塚群1号塚(注3)、成田市川栗台古墳群2号墳(塚)(注4)、八千代市村上供養塚(注5)などがあり、このうち大門塚群3号塚は周溝を伴い、大塚塚群1号塚では、ローム層まで達する掘り込みを方形の塚裾の4辺に2カ所伴っている。また、川栗台の例でも土讓供給箇所と考えられる2基の土壙を伴っており、ロームを利用する塚においては塚裾部に何らかの掘り込みを有しているようである。1号塚裾の溝は、前章でも触れたが、塚構築の際の土砂の供給のために掘り込まれた遺構と考えられる。また、それは塚の立地する台地が馬の背状の幅の狭い台地であったことも影響されているようである。

2号塚では、塚頂部真下の旧表土層上面より1枚の皿形土器が出土しているが、塚の真下より遺物が出土している例は、先に上げた大塚塚群1号塚(注6)、村上供養塚(注7)の他、東京都世田谷区砧緑地内大塚(注8)、最近当センターが調査した船橋市八木ヶ谷遺跡(遠山塚群)3号塚(注9)などがある。大塚塚群1号塚では、古常滑の壺の中に19枚の銅錢と皿形土器8枚が、村上供養塚では古銭を収めた壺2個の周囲に皿形土器6枚が、世田谷区大塚では、大小土師質皿12枚がそれぞれ出土しており、また八木ヶ谷遺跡3号塚では、銅錢などを伴う有田産の瓶が出土している。皿形土器を出土する塚では、2号塚下のように1枚だけの出土というものではなく、何枚かをセットに埋納しているようであるが、本塚の場合もこのような例と同様のものとして把えることができよう。

この旧表土上面で出土した皿形土器と、001号土壙から出土した皿形土器に類似性が認められ

土壇を塚に関連する遺構として把えたことは先述したが、この土壇の性格、意味づけそのものが本塚の構築に反映されているのではないだろうか。

塚は、その性格において、民間信仰に関連するものとして把えられているものが多く、それらは、十三塚、富士塚、行人塚、念佛塚、庚申塚、山伏塚、供養塚などと呼ばれる塚が多い。本遺跡の2基の塚については、第1章で述べたように、地元赤荻区に保存されている畠の面積を記録した古絵図中に庚申塚、大日塚、念佛塚の名称がみえることから、この3つの塚のうちの2基に当たるものと考えられる。残りの1基については、遺跡周辺を踏査したが確認できなかつた為、1号塚のさらに西に残り1基が存在していたものが、道路施設の際に削平されたものかもしれない。古絵図に記された3基の塚の名称を、2基の塚に当てはめることは困難であるが、これらの名称はいずれも庚申信仰に由来するものである。庚申信仰は、室町時代末期～江戸時代初期に在地の民衆の間に浸透していったもの(注10)といわれるが、その歴史は古く、平安時代までさかのばるとされ、中国の道教の三尸の教えと密接につながりをもつものと考えられている。近世においては、庚申は、阿弥陀であり、青面金剛でありまた猿田彦であるように仏教と密教の相方が習合された信仰に変化しているようである。この庚申信仰の中では、塚を築くことも行なわれるようで、「塚をつく」「塚つき」「庚申のまとめ」などとして伝えられている。この行事は、60年に1度の庚申の年、12年毎の中年、七庚申の年、うるう年などにおこなわれるようである。そしてこの「塚つき」の際の主たる管掌者が修驗道の行者であったと考えられている。こうしてみると塚は、庚申信仰という民間信仰の表われの一つであり、多分に密教の修法に基づいて構築された可能性が大きいと考えられる。そして2号塚塚下の001号土壇の墳出岩の出土状況および旧表土層上面で出土した皿形土器は、塚の築造時における祭祀的色彩を反映したものであったように思われる。ちなみに、遺跡周辺の芦田、赤荻、西和泉、東和泉には、多くの庚申塔が残っており、近世農村における庚申信仰の状況が理解されるところである。この庚申塔はその初期には、板碑であったり、自然石であったりしたようだ(注11)。土壇から出土した墳出岩が庚申塔の意味をもっていた可能性もあながち否定できるものではないと思われる。

最後に本塚の構築時期であるが、この時期を推定する資料としては、1号塚より出土している洪武通宝と、2号塚盛土中より出土している寛永通宝があげられる。洪武通宝は永楽通宝などと共に室町時代以降、我が国に輸入された渡来銭の一種で、江戸時代の初期まで流通していた銭貨であり、使用時期を確定することはできない。寛永通宝は、古寛永一枚と、いわゆる文銭といわれる新寛永一枚である。文銭は寛文8年(1668)以降に鋳造され流通した銭貨であり(注12)、この寛永通宝から考えると2号塚の築造は、17世紀中頃をその上限として考えることができよう。また、1号塚より規模の大きい2号塚の築造に必要な土砂は、周辺の土砂だけでは賄いきれるものではなく、当然他の場所から供給されたものと思われる。そしてこの供給の役割

を1号塚の溝がはたしたと考えれば1号塚も、2号塚と同じ頃に、同様の目的をもって築造されたものと考えることができよう。塚周辺の表土層から出土している銭貨はすべて寛永通宝であり、これらは塚への奉賽の意味をもつものであろう。

塚の性格に少しでも考察を加えたい為に民俗学的な発想を援用して推論した訳であるが、以上を本遺跡のまとめとしたい。

引用・参考文献

- 注1 野村幸希「白井第2塚群」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III」房総考古資料刊行会 昭和49年
- 注2 中山吉秀「大門塚群」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II」房総考古資料刊行会 昭和48年
- 注3 野村幸希「大塚塚群」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III」房総考古資料刊行会 昭和49年
- 注4 小川和博、工藤英行「川秉台古墳群発掘調査報告(1)」「成田市の文化財 第10輯」成田市教育委員会 昭和53年
- 注5 村田一男「村上供養塚発掘調査報告書」八千代市教育委員会 昭和49年
- 注6 注3と同じ
- 注7 注5と同じ
- 注8 大場盤雄「歴史時代における「塚」の考古学的考察」「古代学論叢」末永先生古稀記念論叢 昭和42年
- 注9 当センター調査 今泉潔「船橋市八木ヶ谷遺跡(遠山塚群)」鰐千葉県文化財センター(近刊)
- 注10 小川波平六「庚申信仰」「講座 日本の民俗宗教3」弘文堂 昭和54年
- 注11 痕 德忠「庚申信仰」山川出版社 昭和31年
- 注12 小川 浩「日本の古銭」人物往来社 昭和41年

その他 参考文献

- 白石竹雄「塚小考」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III」房総考古資料刊行会 昭和49年
- 栗本佳弘・天野努「村上第一塚群」「村上第二塚群」「八千代市村上遺跡群」千葉県教市公社 昭和50年
- 大野政治、藤下昌信「松ノ木台の供養塚」「遺跡日吉倉」昭和50年



遺跡近景

北西より



1号塚全景

北より

図版 2



1号塚断面

南西より



1号塚断面

北東より



1号塚北側溝

東より



同 西側溝

南より

図版 4



2号塚全景

南西より



2号塚断面

東より



2号塚下001号土壤遺物出土状況

北東より



同 挖り方全景

北東より

図版 6

2号塚旧表土上
遺物出土状況

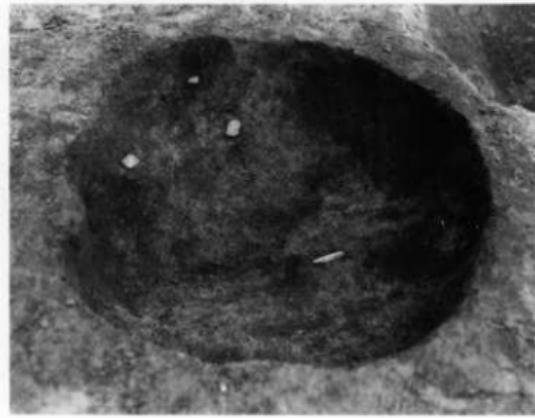


2号塚南西側
古銭出土状況



北より

2号塚下
002号土壤全景



北東より



噴出岩 1



噴出岩 2

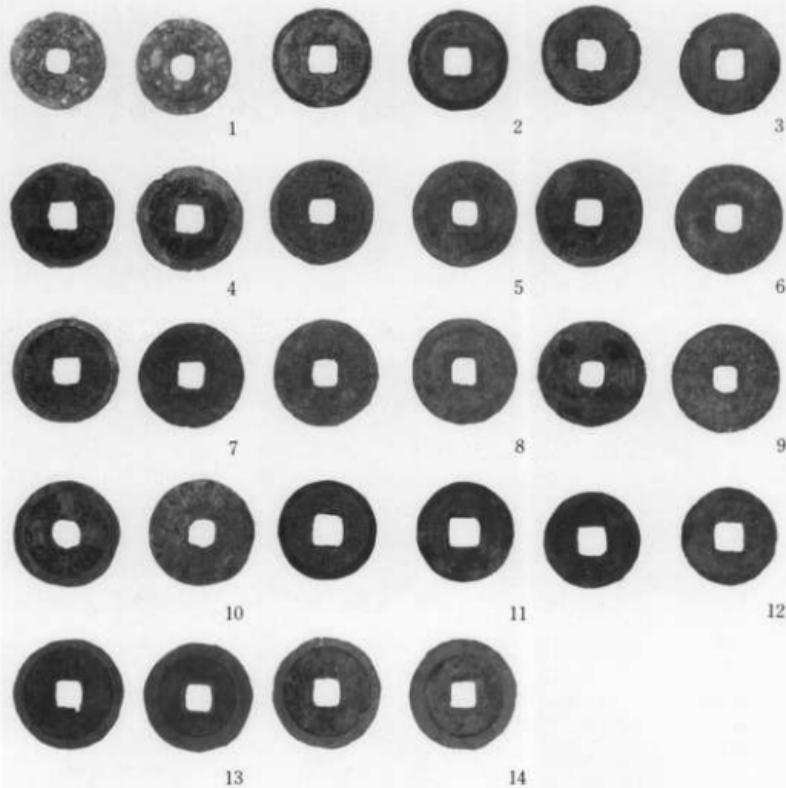


3



4

図版 8



銅錢



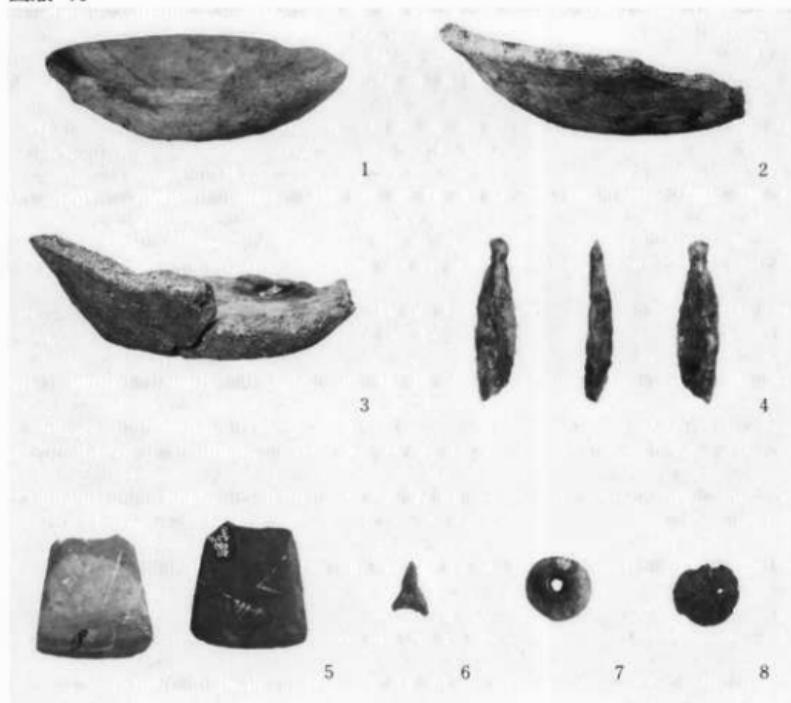
鉄錢

塚および表土層出土の古銭



塚盛土内出土の縄文式土器

図版 10



土器・石器・土製品・石製模造品



1



2



3

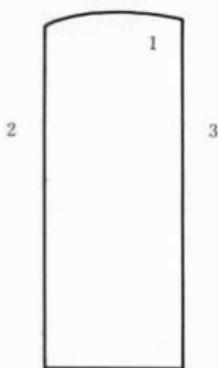


4

塚周辺の石造物。1~3 八幡社境内の庚申塔、4 和泉地区の馬頭観音

図版 12

遺跡道路脇の道標



1



2



3

成田市 芦田 台 1・2号塚
—県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

昭和60年3月30日 発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目1番地10号

印 刷 有限会社 正 文 社
千葉市都町2丁目5番地5号